



2023 年

3 月 第 1・2 週 の 主 日 礼 拝 説 教 要 約

・ 3 月 5 日 : ヨハネ福音書 15 : 1 - 10 .

『 真の葡萄の樹 』

・ 3 月 12 日 : ヨハネ福音書 17 : 1 - 5 .

『 命への逢着 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

バビロニア捕囚からの帰還後に、先人から受け継いだと思われる格言等を複数の文書から取り出し、荒廃したユダの地で民族の再教育のために集成されたものがソロモンの『箴言』だといわれていますが、その中に「命の木」の記述があります。この木は創世記の3章で、エデンの園に生えていた二本の木のうちの、アダムとイブがその実を食さなかったほうの木です。彼らの子孫である人類にはなぜか、それ以来、命の木を熱望しつつ生きる運命が与えられます。

正しき人の結ぶ実は命の木、知恵ある人は人々の魂を捉える。

(箴言 11 : 30)

望が叶えられないと心が病み、願いが叶うと命の木を得たようだ。

(箴言 13 : 12)

今日の聖書の場面でイエスが弟子たちに対して、ご自身のことを「葡萄の木」に譬え、弟子たちがその「枝」であると言われたときに、弟子たちはただちに、その木を「命の木」になぞらえたことでしょう。繋がっていないければ枯れ枝のように焼却される(=死ぬ)ということは、繋がっている限り生きられることを意味します。彼らの印象としてはイエスこそ久しく待ち望まれた「命の木」に等しいことが認知されます。

この譬え話はイエスの告別説教の一部、つまり十字架にかかる前夜の遺言です。このあとイエスの許から失踪してしまう弟子たちの耳に焼き付けておくための内容が含まれています。彼らが退避した後に、関係者や社会からの断絶を経て、「枯れ枝」とならないために必要な言葉が、記憶の中に刻み込まれます。「助け手」としての「真理の霊(ヨハネ福音書 14 : 17)」とともに、未来の彼らの存在そのものを内側から支えてくれる神の言葉として。

あなたがたが私に繋がっており、私の言葉があなたがたの内にとどまっているならば、望むものは何でも願いなさい。そうすればかなえられる。あなたがたが豊かに実を結び、私の弟子となる…

(ヨハネ福音書 15 : 7 - 8)

このように、彼らが紛れもないイエスの「弟子となる」のは、さらなる未来において、その実を結ぶ時であることが明かされます。

《 命への逢着 》

最後の晩餐の席で語られたイエスの告別説教（＝遺言）の祈り中で、イエスは再び「永遠の命」に触れます。

永遠の命とは、唯一の真の神であられるあなた（父なる神）とあなたのお遣わしになったイエス・キリスト（わたし）を知ることです。

（ヨハネ福音書 17：3）

実に謎めいたイエスの言葉です。「知ること」こそが「永遠の命」であると。ヨハネ福音書の 3 章の 16 節には、「御子（イエス・キリスト）を信じる」者が滅ぶことなく「永遠の命を得る」ために、神は「御子」を世に遣わしたとあります。なるほど、先ず何よりも、手始めに人間が御子を「知ること」こそ「信じる」ことの始まりなのかもしれません。さらには「信じる」ことも「知る」ことも、どちらも「永遠の命」にとっては大切なことなのです。

さて、イエスの言葉を聞いた弟子たちの反応の中に、「あなたが神の許から来られたと、私たちは信じます（同書 16：30）」という告白があります。するとイエスは間髪を入れず、ほどなく弟子たちがイエスの許から失踪することを予言します。この段階では「信じる」ことだけでは、まだ不足している何かがあることが仄めかされます。そうです、彼らにはまだ知らされていない神の計画の全様が、隠されているのです。このように、「信じる」と「知る」ことの複雑で微妙な関係が、基督教の信仰の根底にはありそうです。

さて、15 章（15 節）で弟子たちがイエスから、僕（しもべ）ではなく友であるとの認識を新たに受けとったのは、イエスが父なる神から聞いた一切のことを、既に彼らに知らせたからでしたが、これらの「知識」を得た「友」でさえも、まだ知らされてない重大な秘密があるのだとすると、それはいったい何なのでしょう。それは神の子イエスの受難と復活でした。

実はこれも「一切のこと」に含まれていたはずですが。にもかかわらず、弟子たちにはどこまでも、受け入れ難いこと、「あってはならないこと」として拒否されてきたことでした。しかし、これこそが、「イエス・キリストを知ること」、すなわち「永遠の命」に至るための、神の御計画の最たるものだったのです。